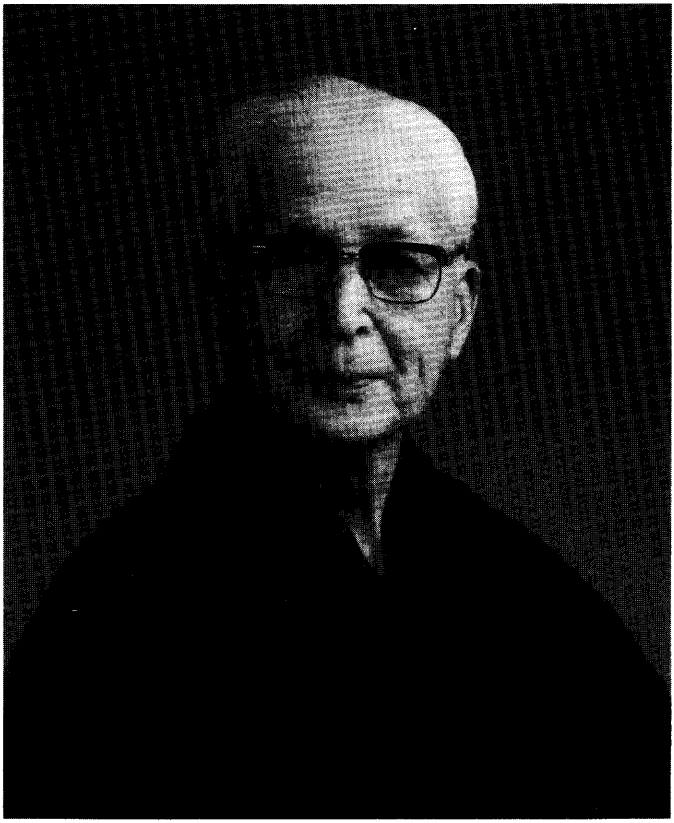
九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[023] 中国文学論集表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/9895

出版情報：中国文学論集. 23, 1994-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY



目加田誠先生　遺影

追悼　目加田誠先生

目加田さくを
岡村繁
秋吉久紀夫
高橋繁樹
吉田ナツ

支那文学研究室の元副手

昭和十六年四月から、十七（八？）年三月迄、支那学第二研究室の副手となった私は、先輩の、東洋史の中江助手、支那学第一研究室支那哲学の阿倍助手、御二方の親切な御指導で、曲りなりにも、支那文学科研究室の仕事を受けもつ事になりました。今迄、演習や卒業論文の調べもので、支那学にも、よく出入りさせていただいていましたから、凡そ、書架の配置はわかっていましたが、これから、毎日、いつでも自由に、これらの書籍をひもとく事が出来ると思うと、胸が躍りました。

当時、支那学も、東洋史は重松教授、日野助教授、支那哲は楠本教授、支那文は目加田教授と、素晴しいスタッフでした。三学科は、とても仲が良く、いつも一緒に遠足に出かけていらしたようです。私が副手になってからは、戦争で、それどころではありません。学生の松本眞昌さんは学徒出陣で出征します。その送別会を、医学部の恵愛会館で催しました。その時のことは、強く印象に残っていて、とても忘れることは出来ません。氏は二度と九大に戻って来なかったのではないでしょうか。

三学科あわせても、学生数が少いので、名簿も一緒でした。たしか、九州、山口の大学高専の先生方と一緒の「支那学会名簿」しかありませんでした。私は、副手の仕事の手始めに、國文学会にならって、支那文学科の名簿・支那文学会名簿を作ろうと思いたちました。目加田教授に申し出て、ノートを一冊購入し、支那文学科だけの名簿を作りました。一期生から、在学中の学生松本さん迄、卒業（入学）年次、出身校、現職、住所、

電話番号を記載したものです。このノートは、ずっと後迄あった筈です。小西昇助手時代までは、たしかにあったようです。

当時、國文科の学生は、高木教授、小島助教授の指示で、周辺学科――（支那文、支那哲、國史、思想史）――の講義も演習にも出ていました。殊に、支那文、支那哲は、講義も演習も全部出ました。支那文は、支那哲もそうでしたが、学生は殆ど一人で、演習の時なぞ、國文は数人は出ましたから、私達、他学科の者も、のび〳〵受講しました。有難い事でした。後年、私が和漢比較文学の方法をとりましたのは、それが平安朝の日本文学研究には、当然の、又、必須不可欠の方法だからとは申せ、一年次から、ずっと演習や講義に出席させていただいたお陰と感謝しております。國文一年次の私共は、所詮、ど素人、目加田教授詩経の講義、「王風」では、箋注をスッと早口でよまれた後、何故、以下のように訓むのか、という、何やら高度の論が展開されているのですが、ついていけず、結論の「詩」本文の訓みだけを、ヨミガナつけるのがやっとでした。後で三人（高木孝詮、麻生朝道、瀬利サクヲ）が額を寄せあって、訓点をたしかめ、ノートを埋めたり。それでも努力の甲斐あって、二年次三年次の老残遊記、紅樓夢の演習になると、少しは楽になりました。とはいえ、支那語の辞書引きで、土日は潰れましたっけ。國文の演習が三つ、支那哲演習一つあった上にです。人数が少いので回転が早く、毎時間必ず当ります。

老残遊記で、「圧驚」という語にはじめて出あって、一同嬉しがり、誰でしたか、病気か事故に遭った学生がいて、「圧驚会」をしたりしました。國文の藤井先輩か東洋史の本村氏かが、老残遊記の演習で、「それぢゃあ、畳の上では死ねまい……」と訳しますと、目加田教授が、「巧い！」と褒められ、一同、嬉しがった事、楽しい思出です。

目加田教授の研究室で、松枝助教授、中江助手、阿倍助手、学生、香川、松本氏で、本よみ会があり、私も仲間に入れていただきました。おひらきの雑談中、目加田教授が、「僕は人と話をして別れたら、今度あう時

追悼　目加田誠先生

は、何か新しい問題か、話題を、お互い見つけた折りにしたい。前とかわらぬ話題ではつまらない。」という意味の事を口にされたと記憶してます。肝に銘じましたね。「なる程、そんな気構えでなくては研究者にはなれないんだな。」と。

又、教授は、他人の意見、たとえ学生の未熟な考えでも、実に謙虚に聞く人でした。吃驚しました。「眞理に対して謙虚なんだな。」と、痛感しました。支那文学副手時代の収獲です。

目加田は、終生、一書生の態度を貫きました。九大や早大の門下生がみえますと、今、どんな研究をしているか、どんな仕事、どんな事に関心をもってるか、聞きたがりました。それを言って貰えないと不満のようでした。門下生の抜刷、著書が送られてきますと、両手で宝物をもつようにして楽しんでいました。失明後は、私に、先ず、目次を読ませました。ついで、問題のある項を読ませ、意見を申しました。機嫌のいい時など、門下生の御名前をあげて、「〇〇君は、あれでいいから、どん〳〵書きつづけて、早く一冊にまとめてくれるといいが。」と申したものです。その時の顔は晴れやかで、全く病苦を忘れているようでした。

老人性痒い〳〵病で、医者に安定剤を投与され、幻覚——幻視が出ました。ベルが鳴りますので寝室に飛んでいきますと、「この部屋中、どこもかしこも書架なんだ。書庫の中にいるみたいだ。中國式の書架で、帙の書籍には文字が書いてあるんだ。読めないがね。僕トイレにいけないんだ。」「幻覚ですわ。研究者の幻覚としては最高よ。右向いて進んでごらんなさい。そう、そこで手伸ばしたらドアでしょ。」「アッ、ドアだ。」という事で落ちつきました。以後、書庫の中に寝てるような幻覚にしば〳〵見舞われました。亡くなる頃は、四ヶ月苦しみぬいた痒い〳〵病もなおり、前夜十一時から、珍らしく安らかな眠りのまま、四月三十日九時三十一分、息をひきとりました。九大、早大時代の楽しい語らいを夢みていたのかもしれません。機嫌のいい表情でした。

九大中國文学科の御発展を祈ります。

一九九四年九月一日

目加田（旧瀬利）さくを
昭16・3・國文卒

追悼　目加田誠先生

目加田誠先生の思い出

われわれ九州大学文学部中国文学研究室に関わる人間にとって、目加田先生は、そのはじめ長年にわたって研究室の輝かしい伝統と広範多彩な研究基盤を築いていただいた偉大な初代教授であっただけではなく、いついつまでも研究室の発展を見守っていただき、折にふれて暖かい励ましや厳しい苦言もしていただきたい大事な先生であった。その先生が、ご家族の手厚い看護や門生たちの日夜の祈りも空しく、去る四月三十日午前九時三十一分、日頃から懇意にしておられたご自宅近くの原外科医院で亡くなられた。享年九十。天寿を全うされたとはいえ、まことに寂しく悲しい極みである。

ところで、まず私から報告しておかねばならないことがある。先生の告別式は、ご逝去の一週間後、先生の清爽なご性格そのままに、よく晴れた五月七日の午後一時から福岡市中央区古小烏の積善社福岡斎場で、先生のご遺志に従い、一切の煩瑣な宗教色を排し、山積する弔電披露も省いて、淡々と厳粛清楚に行われた。喪主はサクヲ夫人。葬儀委員長は、これまた先生のご遺言に従って、不肖ながら私が仰せ付かった。菊花に囲まれた先生の遺影の下、福岡・九州はもちろん、遠くは東京や東北・東海・近畿からも大変多くの知友や門生が馳せ参じてくださって、満堂の参列者は七百余人。今更のごとく先生ご生前のご人徳を目のあたりにして感慨無量であった。

当日の式次は、まず葬儀委員長の私が参列者への謝礼、先生のご経歴や学問的業績のあらましを紹介した後、

九大時代の門生代表として九大名誉教授の秋吉勝広氏、早大時代の門生代表として早大教授の稲畑耕一郎氏、早大時代の門生で先生の晩年に終始献身的な侍養をされた摂南大学教授の高橋繁樹氏が、それぞれ先生の遺影の前でお別れの言葉を述べられた。いずれも参列者の胸をうつ、真心のこもった追悼の辞であった。

ついで、先生の名訳『詩経』三〇五篇の中から有名な「桃夭」三章の訳詩と、先生最晩年の歌集『残燈』の中から詩人大岡信氏が『朝日新聞』の「折々のうた」に取り上げた一首——

この冬は得過ごさじと思いしに
命なるかなまた春に逢う

との二篇の録音が静かに式場に流された。浅野誠氏の作曲、川口京子さんの歌唱、川崎晴美さんの伴奏によるものである。特に川口京子さんは、先生が日頃大変可愛がっておられた女流歌手であった。並み居る参列者は、しばしその荘重清冽な調べに魅了され、満堂が大きな感動につつまれた。

最後に親族代表としてご長男の目加田融氏が参列者に謝辞を述べられ、ついで参列者は一人一人先生の遺影の前に進み出て白い菊花を献じ、心から敬慕する先生に尽きせぬ別れを惜しんだのであった。かくして午後三時ごろ、先生の告別式は終った。参列者のだれもが口をそろえて、しみじみと「自分が死んだ時も、このような告別式でありたいものだ」と話し合っていた。それほどに清澄で感動的な告別式であった。

先生のご生涯の閲歴やその赫々たる学問的業績については、すでに大方の熟知するところであり、また『東方学』『詩経研究』の最近号に追悼文を寄稿しておいたので、ここでは先生の思い出を若干ながら述べてみることにしよう。

そのむかし、私が先生のお名前を始めて知ったのは、私が二十歳ごろ、戦時中の昭和十八年春のことであった。当時私は旧制の広島高師の学生であって、最近まで山口大学で中国文学の教授をしていた岩城秀夫さんらと仲よく机を並べて勉強していたころ、先生の名著『詩経』が、東京の日本評論社から『東洋思想叢書』の一

冊として出版された。先生のこの『詩経』は、今も私が秘蔵している初版本の奥付によれば、昭和十八年三月十五日第一刷五〇〇〇部発行、定価一円八十銭。B6版三一二頁。私は、この『詩経』が書肆の店頭に出るや、直ちに買い求めて読みはじめた。そして読み進むうちに、従来の陳腐な学説とは全く異なる斬新な先生の詩経観にすっかり魅了され、戦時中で火の気もない肌寒い早春の夜を徹して、この新刊書を熟読した。その時の熱っぽい学問的感激は、五十年を経た今もはっきりと覚えている。私が大学の卒業論文に『詩経』を選んだのも、正に先生のこの著書の強烈な啓発による。

ついで私が始めて先生の謦咳に接したのは、それから七、八年後、戦争が終わって間もない昭和二十五、六年の秋のころ、九州大学の法文学部で中国哲文学の研究発表会が開催された時であった。この時、私は生まれて始めて博多の地を踏み、九大の構内に入ったわけだが、もちろんその時は、この土地、この大学が、私の生涯を決定づける重要な研究教育の場になろうとは知る由もなかった。会場は、当時九大正門を入って左側にあった旧法文学部の講義棟の一室。その会場に私が入っていった時、すでに中国哲学の楠本正継先生が端然と上席に就いておられ、まだ若かった岡田武彦さんや荒木見悟さんらも来ておられた。そこで私がこれら列席の方々に一通り挨拶をすませたころ、突然、ドアをあけて緑色の国民服を着た若々しい一人の先生が、つかつかと足早に会場に入って来られて、楠本先生の側の席に就かれた。聞けば目加田先生である。これにはびっくりした。日頃旧制大学の老教授ばかりを見慣れていた私には、とても信じられないほど颯爽とした先生であったからである。この方があの『詩経』の目加田先生であったのかと、私は早速、胸ときめく思いで先生の席に参上して、二言三言このたび研究発表会に参加した挨拶を申し述べた。すると先生は、とっても気軽に応対してくださって、にこにこしながら「ああ、あなたが岡村さんですか。ようこそ来てくださいました」と言葉をかけていただいた。これにもまた私はびっくりし恐縮したが、このように先生が、当時まだ駆け出しの若い私の名前を覚えていてくださったのは、それより少し前に私が『文心雕龍索引』を油印出版して、その一冊を先生にも献呈

していたからであろう。

この研究発表会で私は、六朝時代の諸文献に見える用語「体量」の語義について発表した。発表後、早速先生は、近世用語の「体量」との関係について質問をしてくださった。この時、その問題について全く用意のなかった私は、一瞬とまどったが、朱子の用例などを若干あげて両者の語の成り立ちが異なることを説明し、なんとかその場を切り抜けたように記憶する。それはともかく、この時、私は、今更のように先生の学問の該博さに驚嘆し敬服した。

以後、ありがたいことに先生は、たえず私の未熟な研究にまで暖かく目をかけてくださって、私が論文の抜刷をお送りするごとに、その都度丁寧なご注意やご感想を賜わりつつ、いつしか長い歳月が過ぎた。その間、私は広島大学文学部の副手・助手から神戸の高校教諭に転出し、ついで名古屋大学文学部の助手になり、さらに東北大学教養部の助教授になって全国各地を転々としたわけだが、とりわけ私の生涯の命運を決定づけ、私の学究生活の行くえを確定するほどに、先生から私が筆舌に尽くしがたい深い恩恵を蒙りはじめたのは、先生の九大ご退官が数年後に迫ったころ、私が東北大学に赴任して間もなくのころからであった。

昭和四十年、先生が主宰される文部省科学研究費による綜合研究「六朝芸術論の研究」に、そのメンバーの一人として、わざわざ遠い東北から私を加えてくださった。この研究は、九大文学部の中国文学・中国哲学・美学美術史・東洋史・考古学・印度哲学の教官を中心に、東京や奈良の学者も交えた大規模な構成であったが、奈良への見学旅行もあり、東京・福岡での研究会もあって、実に楽しく有益な会合であった。そして私は、この時、九大文学部の人々と心から親しく交われるようになった。今思えば、これは恐らく先生のさりげなく、やさしいお心遣いであったのであろう。

そして、忘れもしない昭和四十一年の早春のある日、東京の本郷会館でこの研究会が終わった時、先生は特に私を別室にお招きくださって、九大に転任する気持ちはないかと懇切なご招請を賜わった。身に余る光栄で

あり、ありがたいことであった。しかしこの時は、あまりに突然のことであり、また東北大の同僚にも了承を得なければならないので、先生のこの並々ならぬご懇情に深謝しつつも一応即答を保留させていただいた。それにしても私は、またもや度肝を抜かれてしまった。実は、私は、その前年の秋、岡山大学で日本中国学会が開かれた際、事もあろうに『楚辞』の成立について発表し、先生の学説とは全く対立する卑見をぶち上げたので、純然たる学問上のこととはいえ、てっきり先生のご不興を買ったと思い込み、以後できるだけ先生との直接の対面をさけていたからである。それにもかかわらず、このように爽快な寛容さをもって私を先生の後継者としてお選びくださったご厚意に、私は心底から感激し感謝した。そして、この時、先生のこのご恩顧に報いるためには、身命を賭しても九大のために働き、九大の中国文学研究室の発展のために身を捧げようと心に堅く誓った。

とはいえ、結局、私の非力のために、なにほどのご恩返しも叶わず、かえって先生が長年かかって築かれた芳潤な学風を損なってしまったように思われてならない。ここに深くお詫び申し上げる。

私の九大着任後、その長い間の先生についての懐かしい思い出は数えきれないほどたくさんあるが、残念ながら紙幅の都合上、これを割愛せざるを得ない。先生のご冥福を祈る。

九州大学名誉教授
久留米大学教授
岡村繁

目加田誠先生弔辞

謹んで目加田誠先生の御霊の前に申しあげます。ただいま、私ども九州大学で親しく先生に教えいただいたものたちは、一同ひとしく心の支えを失ったような限りない悲しみに閉ざされております。先生といまこのような貌でお別れせねばならぬとは、いつかは迎えねばならぬこととは言え、例えようもありません。

先達て、平成三年三月二十一日でしたね、九州大学で教えをうけた私どもが、先生の八十八歳の米寿の祝いを、暖かな陽射しのお宅で催したのは。長い間離れ離れになっていて、消息も途絶えがちであった私どもは、縁側の椅子に長い時間お座りになり、ご熱心に私どもひとりひとり動静について語られるその変わらぬご慈愛と、まったく衰えることのないその記憶力に対して、こみあげる感動と、あらたな驚きとを確認いたしたばかりでした。

思えば、先生が九州大学に京都の第三高等学校から赴任されたのは、昭和八年七月で、九州大学を停年で辞められ、東京の早稲田大学に行かれたのが、昭和四十二年三月でしたから、数えてみれば、約三十四年間、九州大学で公的に私どもを導いていただいたことになります。その間、先生は九州大学中国文学科の初代教授としての重責を果たされたのはもとよりのこと、あの日本の敗戦直後の混乱期に、若い私ども学生を励まされて、いまや全国的にもユニークな存在となっている『中国文芸座談会』を発足され、現在の学術誌『中国文学論集』の前身『中国文芸座談会ノート』を発行されたのは、特に銘記すべきことがらです。当時私どもは、箱崎の旧

い研究室で頬を火照らせながら、楽しそうな先生を囲んで昼夜をおかず、議論に夢中になった興奮をいまでも忘れられません。

先生の私どもに接触された姿勢は、いま改めて思い返すと、まるで天来の慈雨のようでした。決してご自分の好みに合った花を咲かせようとなさらずに、どんな花か、赤か黄色か大輪か野花か、それぞれに異なった持ち前の花を咲かせようと心掛けておられました。これはたやすいようにありますが、並大抵のことではありません。

先生にお会いするたびに、私どもはいつも限りない優しさと、同時に切迫する峻厳さを感じておりました。先達ての米寿のお祝いの折りにも、それをひしと感じたのは恐らくわたしひとりではなかったと思います。私どもに先生は、ご自分の出版なさったばかりの著書『洛神の賦』（講談社学術文庫）と、論文「中国の文学と儒・俠の関係」とを配られました。なにも付け加えて言われませんでしたが、わたしには受け取れました、二つのことが。一つは学問への執念であり、いま一つは人間の生きるということの意味。それは人間の本性を正しく生かすことであると考えます。

いつでしたか。先生はわたしにこんなことを言われました。「学問するとは、自己を反省し、自己を養っていくことで、ちゃんとした人間になることです」と。またこんなことも言われましたが、覚えておいでですか。「ひとの痛みの分かる人間になること」と。あの柔和なお顔に私どもは、接するたびに、背筋の引き締まる緊張感に浸されていました。

だが先生そうは申しましても、今日ここに先生に置き去りにされてしまった私どもは、あたかも親を失った雛鳥のごとく、チッチッといたずらに巣の周りを旋回するばかりでまったく途方に暮れています。あの温かなお顔を思い浮かべながら、声もかすれて立ち竦んでいます。いまはただただ嘆きながらも、私ども九州大学で教えいただいたものたちは、先生の御教訓を肝に銘じて、あの大野城市の瓦田の先生のお宅の庭に、手ずから

植えられた曲阜の「柏」（このでがしわ）のように互いに枝を交わして成長していく決意です。ご安心ください。

お別れの式に臨み、謹んで御冥福をお祈りいたしますとともに、いつまでもわたしどもの上に御加護を賜わりますようお願い申しあげます。

さよなら目加田誠先生、安らかにお眠りください。

平成六年五月七日

九州大学門下生代表
九州大学名誉教授
秋吉久紀夫

追悼　目加田誠先生

目加田誠先生の晩年の研究と文学

先生の晩年は病気と切っても切れない日常だった。ふつうこのような状況は「病いとの壮絶な闘い」とでもいうのだろうが、先生の病気は「闘い」などという勇ましいことばはふさわしくなく、ただ苦しさに耐えながらじっと我慢しておられたというのが実情だった。苦しい呼吸困難の発作がしばしば襲い、幾度か危険な状態に陥りながらも、不思議なことにいつもなんとか乗り越えられ、回復の後は普段の爽やかな様子で、最後まで病苦の悲壮感を表に出されなかった。しかし周囲の我々にとってはなんとも痛々しい様子であったことも事実だった。

このような中、晩年にかなりの量の仕事がなされた。『目加田誠著作集』（龍渓書舎・一九八一～一九八五）全八巻を代表に、『夕陽限りなく好し』（時事通信社・一九八六）、『漢詩日暦』（時事通信社・一九八八）、『洛神の賦』（講談社・学術文庫・一九八九）、『詩經』（講談社・学術文庫・一九九一）、『中国の文芸思想』（講談社・学術文庫・一九九一）、『春花秋月』（時事通信社・一九九二）、歌集『残燈』（石風社・一九九三）などの多くの著書が次々と発表された。その内容は過去の著作の再刊と随筆および自作の歌集の出版で、研究の再刊についてはいずれも細部にわたる再検討を経たものである。

先生といえば、『詩經』研究がすぐに脳裏に浮かぶほど、代表作となっている。もっとも早い著書は戦中の一九四三年に日本評論社から出された『詩經』で、『毛傳』『鄭箋』から清朝に至るまで、永く続いた儒教の

伝統的解釈に疑問を懐き、中国の古代歌謡として画期的な新解釈を世に問うたものであった。歴代の『詩經』研究の再検討と綿密な字義解釈による新解釈は、儒教道徳による牽強附会な解釈を一掃し、『詩經』本來の姿はかくあるべしという、中国古代の生活感あふれる新鮮なものであった。この研究が発表され、日本の『詩經』研究は一変した。またこの書は近年表現等を改め、タイトルもそのまま『詩經』として講談社学術文庫に加えられた。

先生自身、よく「私は長らく中国文學を研究してきたが、最後はやはり『詩經』に戻る」といわれていた。その理由は『詩經』に歌われる古代の人々の喜び、悲しみ、嘆き、祈りが読むものの心を動かして止まない『詩經』の本質をよく理解しておられたからだ。まさに文學の本來を直視する態度は、『詩經』本來の姿をよみがえらせ、二千年近く続く儒家思想の伝統道徳をも覆してしまったというべきか。

『詩經』の本質を明らかにした先生独自の方法は、ほかの「聞一多評傳」（一九五五）をはじめ、王維・杜甫・白居易・元稹ら唐代の詩人たちに関する著作などにも発揮され、それぞれの詩人がその時代をどのように精一杯生きたか、人の生き方に関する先生自身の共感がモチーフとなった、先生ならではの風格ある内容になっている。この傾向はいわゆる単眼的な学問研究とはいささか異なり、単に考証だけに終わらせない先生の独自の立場を示すものである。

もう一つの傾向は、人の生き方に対する共感が中国文學の本質への探求に発展し、『文心雕龍』の全訳を始め、魏晉六朝の文学思想の研究にまで進んだことである。これらの論文は「『雅』について」（一九三七）、「『風』の説」（一九四二）、「六朝文藝論における『神』『氣』の問題」（一九四八）、「劉勰の風骨論」（一九六六）、「『詩格』及び『詩境』について」（一九四九）などのように、「風」「神」「氣」「骨」「格」等個々の字義の概念によって中国の文芸を論じようとしたものであった。これらの概念はどれもなかなか究明し難い難解なものだが、先生独特の人の生き方と密接に関連する研究手法によって、文学が何を求め何を目指すものか

追悼　目加田誠先生

を論じる、なんとも格調のたかい内容となっている。この字義の概念による方法は先生自身もいわれるように、はなはだ得意の手法であったようだ。

このほか翻訳も『詩經』『楚辭』（以上、平凡社「中国古典文學大系」）、『世説新語』（明治書院「新釈漢文大系」）、『文心雕龍』（平凡社「中国古典文學大系」）、『唐詩選』（明治書院「新釈漢文大系」）、『唐詩三百首』（平凡社「東洋文庫」）など、広い分野に渡って数多く手がけておられる。中でも『詩經』の訳は独特の歌訳で、生涯を通じて何度も訂正を重ね、他の追随を許さないまでのレベルに達している。これについて先生は、「私は私の『詩經』についての研究を邦訳という形で表そうとしたのだ」と述べる。また『詩經』の訳を歌訳とされた理由については、従来どおりの訓読も考えたが、助字はどうしても訓読が無理なのであのような形にした、とおっしゃっていた。あるとき私は先生に、誰にでも正確に意味がわかるようにもっとやさしい口語訳にしてほしいと要望したことがあった。そのとき先生は私があまりにしつこく野暮なことをいうものだから、とうとう最後にニヤッとほほ笑み、「あれは私の道楽だよ」といって、私の発言を遮ってしまわれた。翻訳についてはこのほか、北京留学中に三度も繰り返して読んだという『紅樓夢』も真剣に考えておられたが、九大で同じ研究室に属しておられた松枝茂夫先生がすでに訳しはじめていたのを知り遠慮した、ということをうかがったことがある。全く残念だ。

先生の研究は先秦から現代文學まで全ての時代におよんでいるが、ただ一つ陶淵明に関する研究だけが缺けていた。そこで最後に陶淵明の研究をやっておこうと、ひそかに作品を読んで研究を進めておられた。そして一九八七年の秋頃、比較的年齢の若い我々数名といよいよ作業を始められたが、傳と顔延年の誄を読んだところで体調をくずされ、中止になってしまった。これも残念なことだ。

先生の研究対象はたいへん広い範囲にわたっている。しかし晩年の先生は中国文學の研究よりも、何度も入院を繰り返し、死を実感するうちに、従来からの人の生き方についての関心に加え、さらに人の死に対する関

心を強くもたれるようになった。このことは晩年の著作にはっきりと表れている。『夕陽限りなく好し』はそれまでとは全く違った世界、両親・兄弟・家族・親類、あるいは恩師や親しい友人たちの死が描かれている。『春花秋月』は生と死との狭間をさまよいながら、ほんの短い平安の一時を語られたように思える。これらは決して研究の成果を問うものではないし、また余技としての人生を語る随筆でもない。すべて自らの文學を初めて率直に描かれたものと解すべきだ。そのためか、とくに始めに出版された『夕陽限りなく好し』は、これまで経験したことのない全国のお年寄りや身体の不自由な人々などの共感を呼び、思いもかけぬ多数の反響が寄せられた。これには先生自身もたいへん驚いておられた。

著作集第四巻『中国文學論考』の巻末「論文集のあとに」（講談社学術文庫『洛神の賦』では「解説にかえて」）は先生自身自らの研究の軌跡を初めて述べられたもので、たいへん興味深い。この中で先生は学者としていかに中国文學の研究を歩んできたかという専門分野だけではなく、自らの文學の軌跡にも触れられている。それによると、先生は西欧文學ではロシア文學、日本文學では江戸文學から近代文學を中心によく読まれ、果ては人の生死を論ずる宗教書や『新約・旧約聖書』にいたるまで関心にまかせていろいろ読んだという。その中でも先生がとくに好まれたジャンルは戯曲で、中国はもとより欧米の戯曲から日本の歌舞伎・浄瑠璃までたいへんお好きで、とくに浄瑠璃は造詣が深く、私が見舞いにいくと、いつも待たれていたかのごとく文楽の話に花を咲かせておられた。このような一時は私にとってもたいへん楽しい時間であった。

晩年の先生は、「論文集のあとに」や二冊の随筆また日常の話題などから考えると、中国文學の研究だけではなにか物足りぬものを感じておられたにちがいない。中国文學には晩年の先生の心境を反映しうる、人の弱さ、人の生死を真剣に見つめる作品はなく、何度も自らの死に直面され、死ぬことと生きることの苦しみ・喜びを見極められた先生にとって、最後は自らの文學を語らざるをえなかったのではないか。歌集『殘燈』はそのような先生の心の奥底を、なにものにも憚ることなく、率直に語った作品である。

追悼　目加田誠先生

『殘燈』は新聞やテレビなどマスコミにも取り上げられ、非常に反響が大きかった。その理由は明を失った碩学が出した歌集ということだけでなく、この作品が現代社会の抱える老人問題を歌という形で訴えていたからだろう。しかしもともと『殘燈』には老人問題を社会に提起しようなどという大それた意図などない。ただ、年老いて、明を失い、そして病んでも生命ある限り生き続けるしかなかった先生がその生きる苦しみを短歌にして訴えた、人間らしい一作品に過ぎない。

歌集『殘燈』は先生が最後に残した作品である。そしてこの作品は『夕陽限りなく好し』とともに、『詩經』研究の大家であった先生が我々文學研究の後学に、「文學とは人間の真実を描くことにほかならない」とあらためて示唆してくれているように思われる。

摂南大学国際言語文化学部教授

高　橋　繁　樹

目加田先生——この十年

目加田先生に頂いたお手紙の最後は、昨年（九三年）二月二十八日の消印がある。それは私の夫、吉田瑞樹宛であった。昨年一月四日朝、突然脳梗塞で倒れた夫は、病院のベットで半ば昏睡、半ば覚醒の日々であった。先生のお手紙は、

「お見舞の手紙を書こうと思って筆を取りました。もう殆んど目は見えぬので書けるかどうか分りません。書いても読めぬかも知れません。」

という前書きに続いて、不本意な病いのためベッドに臥す身となった病人の辛さ、佗しさ、やりきれなさに深く思いを到らせ、次に、まだ若いんだし一家の柱であるという立場の人だから、まわりの者のためにも堪え忍んで充分療養するようにという励ましの文面が続き、先生御自身が御両親を早くに亡くされ、両親の揃っている家庭のすばらしさを説いて、見舞いの品を送るから自分が側に居ると思ってくれ、——そして、

「もう何も見えなくなってしまった。読み返そうとしてもただボーッと白い紙がかすんでいるだけです。いろいろ書くつもりだったことがもう書けない。一旦之で止めておきます。」

と結ばれている。小さな字で便箋四枚ぎっしり書かれているのである。

翌朝私はその手紙を病院に持って行き、夫のそばで開封して代読してあげた。夫は一しきり慟哭したあと、眠りに陥った。私は電話口に駆けて行って、瓦田のお宅のダイヤルを回した。「眼がお見えにならないのに、

追悼　目加田誠先生

どうやって書かれたのですか？」――サクヲ先生がお出になって、「指先でたえず便箋の行間をさぐりさぐり、勘をたよりに書いていましたよ。判読できなかったのでは――？」

それ以後、当方からの手紙はサクヲ先生が代読して下さって、誠先生とは電話でお話し頂く日々となった。

今からちょうど十年前（八四年）の春休み、私は日本海側を北の能登半島から下る一人旅をした。目加田先生の白内障の手術の結果、「成功した」をくりかえす執刀医の言葉とは裏腹に少しも改善されていないこと、それにもう一つ私の息子が精神を病み、登校拒否が続いていたことの両方の悩みを抱えて旅をしていた。島根県の出雲市まで下って来たとき、半島突端の小高い山の上に、眼の病いを治す神様が祀られていると土地の人から聞いて探して行った。「一畑薬師」という神様であった。お祓いしてもらいお守りその他求めて帰って来た。目加田先生はそのお守りをいつも上着の内ポケットに収めていて下さった。この時期は、東京にもお一人で行かれ、眼鏡も見つかって、片方が見えるようになり、お元気だった。「夕陽限りなく好し」の原稿も御自分で書かれ、朱筆を入れられた。そしてその翌年五月、朝日カルチュアセンターでの先生の受講生中心に「中国歴代王都の旅」が挙行された。私はその直前に胃の幽門部に癌が見つかり、すぐ切除するよう医者に言われていたが、「これが最後の中国旅行になるかも知れない」と思って、無謀にも胃癌をかかえて参加した。目加田先生は膝の関節を痛められてそれでも団長という責務のため、車椅子の上から一行三十数名を引率された。サクヲ先生と門下生四人がおそばに居たとは言え、大変な御心労だったため、ついに西安滞在中に心臓発作に見舞われ、陝西省人民病院に一週間入院された。先生がひどい目に会われて、私は無事帰国できた。

その後、特殊な眼鏡に数種類の拡大鏡を重ねて、先生は私共の漢詩の勉強会を指導して下さった。メンバー五人が各自担当分の漢詩を訓読して訳をつける仕事であったが、原典を明らかにし、作者とその詩の作られた背景を明らかにし、詩語一語一語の典故、用例、そして意味を調べてゆくその方法について、先生はとりわけ厳しかった。詩中のたった一語の用いられ方がわからず、いい加減な訳でもつけようものなら即座に「うん？

――そこは、――」と聞き咎められた。一つの言葉の解読に何週間も没頭して、泣き出したくなる時もあった。私は大学院時代、院生が一人しかいないゼミ（目加田先生と助手と研究生と他研究室の聴講生の中に私ひとり）で、毎週毎週読解の指導を受け、その準備のため二年間ほとんど布団をきちんと敷いて就寝できた日がなかった頃のことを想い出した。「文選〈李善注〉」、「楚辞〈王注〉」そして「文心彫龍」。一つの語句の意味を尋ねられてそれを答えると、「その意味は何で調べた？」と問われ、当時「諸橋大漢和」しかなかったので、それで調べました。と答えると、「孫引きはいけない。原典に当たって用例を可能な限り自分で調べなさい」とやられた。そして私は向いの書庫をはいずりまわる虫となって、夜になり、外からよく鍵をかけられたものだった。あの頃の目加田先生の厳しい姿勢に再び接することができて、この間の勉強会は毎回身のひきしまる思いだった。瓦田のお宅の門扉を開けて、玄関までの小径を歩くとき、胸がどきどきしてどうしようもなく緊張してしまう癖は、昔も今も同じである。そしていつも「虚而往、實而歸」。「漢詩日暦」を出版して下さったあと、陶淵明を読んでいたが、先生が体調をくずされて、八八年以降、勉強会は中止となった。それでもしょっちゅうお宅に押しかけた。先生が避暑地に選ばれた山中湖畔のホテルにも、ホテルで急病になって入院された別府の病院にはほぼ毎週押しかけた。そしていよいよ御自宅で臥して過ごされる日々には、先生の寝室のベッドわきまで侵入した。専門のことはおろか、文学全般のことについても、人生のことについても先生のお相手が勤まるはずのない不肖の弟子にも、時間を割いて会って下さって、実に多くのことを教えて下さった。

あれは歌集が出版される半年ぐらい前だったから昨年（九三年）の初春のころだったと思う。私は真紅のセーターに白のオーバーオールを着ていた。穏やかな日射しが先生のベッドのまわりを明るく包んでいた日であった。「今日はあたたかくてとても気分がいい」と仰言った。私は先生のすぐそば四・五十センチの所に立って、日射しを身体の前面に受けて、先生に「先生、今日私は何色の服を着ていますか」すると先生は「うん？下の方は明かるいが、上の方はくすんだ感じでよくわからない。青かね、黒かね。」――私は次の言葉を失って

しまった。すぐに別の話題に先生は私を引き入れて下さったが、いつものようにお宅を辞したあと、私は瓦田からＪＲ大野城駅までの道を泣きじゃくりながら辿った。

そしてあの「殘燈」を拝受して、お礼の手紙に私はこう書き綴った。「御本が届けられた時、私は台所仕事の最中でしたので、主人が受け取って開封し、先に読みました。途中で泣き出して本を閉じ、又開いては読んで泣いていましたが、口がきけなくなった重い口をやっと開いてひとこと『お前は読まん方がいい』と申しました。全部読み終ってすごく辛かったけれど、一方では何と美しい世界かという感動にとらわれました。先生が著作集を出された時、「楚辞」の原稿の校正を担当し、先生が展開される「楚辞」の世界に浸りきってしまった時期がありました。あの絢爛豪華な、そして風雅な文学の世界を、先生の御歌の中に再び見ました。現実の視覚世界が閉ざされると、その分先生は精神の世界というか心象世界の中に見事な豪華な文学の、花を咲かせておられます。私にはどうしても「楚辞」の中の先生と「殘燈」の中の先生が二重写しになってしまいます。」と。これはもうただごとではない御本を出版された、と思ってしまった。

昨年の暮れお邪魔したとき、「殘燈」の反響が大きく、テレビ出演や新聞の取材などで、少しお疲れのようだったせいか、夜のお話しをなさった。「眠くもないのに目を閉じていると暗闇の世界から魑魅魍魎が舞い出てくるのだ。『病中夜夢百鬼現』というあれだよ。まわりは朝になったと起き出して動きまわるけれど、朝になっても僕は夜の続きの闇の世界なんだ。」始めから、或いはごく幼い頃から盲目である人は、目以外の器官が相当にその代役を果たし、触覚で、味覚で、聴覚で現象世界を把握できると聞いているが、先生はごく短い期間しか経験されておられないので、手さぐりの所作もぎこちない。目の前のお湯呑みをまさぐられる時も手先のレーダーが距離感をはかるしぐさでなく、いきなり見当をつけてやっと手を伸ばされる。そしてその勢いで、お湯のみが倒れる。そんなこんなの苛立ちが、とりわけ静寂の襲う夜の時間に、先生の安眠を妨げているのかもしれない。「一畑薬師」を恨んでも詮ないこと、視力が回復しないのであれば、せめて先生に心の灯を

ともしつづけて下さいとお願いして、「残燈」の続きを是非と申し上げると、いや今のところもう作る気はない、と仰言った。暖かく少しでも快適な新年を迎えられるよう祈って年の瀬を迎えた。私の夫は十二月二十八日かなり重い言語障害の後遺症をひっさげて一年ぶり退院した。

四月三十日目加田先生が急逝された報せに接し、（夜だったので）翌朝参上して、あくまでも凛としたお美しい先生に、「先生、今はもうすっかり何でもお見えになれますね。先生のお好きな紫色の花です。」と思わず話しかけていた。思えば昭和三十三年、九大の中国文学科に進学して以来、早稲田に行かれた七年間を除いても、通算三十年間、私は目加田先生のお教えを受けて来た。この身は父母にもらったけれど、今日まで育てて下さった目加田先生を、「生涯の師」と仰ぐことのできる私は心底幸底せ者である。不肖の弟子がたった一つ誇れることなのである。

河合塾講師
吉田ナツ